

座長／和歌山県立医科大学リハビリテーション科／田島文博  
／東京大学医学部附属病院リハビリテーション科／緒方 徹

東京 2020 パラリンピック大会の開催決定によって日本国内のパラスポーツへの関心が高まるとともに、パラスポーツ実施に向けての医学・科学等のサポート体制も整備が進んだ。当初から懸案であった暑さへの対策に加え、開催延期の要因となった新型コロナウイルス感染症の蔓延など、医学的な対応を必要とする課題も多かったが、それを越えて大会が無事開催されたことは日本のパラスポーツの歩みの中で大きな一歩となった。第 33 回日本臨床スポーツ医学会学術集会での本シンポジウムはそのレガシーを総括する意味合いも含め、日本パラスポーツ協会医学委員会委員長である陶山哲夫先生のオーガナイズのもと開催された。残念ながら事情により陶山先生は登壇できなかったが、田島文博先生が登壇され、筆者とともに座長にあたった。

シンポジウムではまず伊藤倫之先生より COVID-19 対策とメディカルチェックについての報告があった。パラスポーツにおけるメディカルチェックは基礎疾患の存在やベテランの選手が多いことなどから検査結果が正常範囲からはずれることが多く、個々の選手に対し慎重な対応がなされる。今大会ではさらに感染対策の観点での大会運営となり、今後続く大会にむけて示唆に富む取り組みが紹介された。

続いて選手村で診療にあたった羽田康司先生より「東京 2020 パラリンピック選手村の日本選手団診療所における医療活動」が紹介された。ここでも感染対策は重要なテーマであり、競技会場との連携など開催国ならではの経験が紹介された。

山田陸雄先生からは「パラスポーツにおける Emergency Action Plan の重要性」としてスポーツ現場における安全管理についての国際的な動向と具体的な取り組みについての紹介があった。近年、パラスポーツにおいても大会開催中の脳震盪発生が厳密に報告されるようになるなど、今後の安全管理体制整備に向けて新たな視点の共有となった。

続いて競技の実践をテーマとした演題と共に、基礎的な取り組みも紹介された。上述のように暑熱対策は事前から大きな課題となっており、その基本的な考え方から実際に東京大会に向けて行われた調査研究や対策について上條義一郎先生より「パラスポーツにおけるメディカルサポートの実際：暑熱対策」の紹介があった。今後もアジアでの大会など暑熱環境下での競技開催は定常的に行われることから、その重要性を再認識する機会となった。最後に「障害者スポーツ医科学研究拠点の活動」として梅本安則先生より和歌山医大が実施している拠点型の医科学支援の取り組みが紹介された。パラスポーツの選手の活動拠点は全国に点在しているが、こうした拠点があることで情報や研究手法の集約がなされ、波及効果をもたらしている。今後も拠点と各競技団体との連携が重要になる。

総合討論では今後のパラスポーツの取り組むべき課題についても議論がなされた。パラスポーツに対する医科学支援が本格化して約 20 年のタイミングで東京でのパラリンピック開催をむかえ、安定したメディカルチェック体制や、大会に向けたコンディショニング管理、練習への医科学支援の充実は大大会の成功の原動力になったことは間違いない。その一方で、パラスポーツの競技団体の医学支援の状況については個別差が存在する実態もシンポジウムを通じて共有されることであった。今後、より多くの医師がパラスポーツに関わり、医科学支援をさらに充実させるとともに、競技や地域による差のない支援の均てん化が重要な課題であるとの認識が共有され、シンポジウムを終えた。